

題』が何であるかを、そこに含まれる諸問題を『道』にそって示し、妖術やら憑依霊やらの観念によって組織された物語として提出し、「それは相談者の苦難の経験を、それらを語り直すことを通じて変質させ」ていることを明らかにした(浜本 1993:18)。この論考の主題は、本論と問題意識を共有するものであり、一つの指針となるものである。

本論で分析に際して中心となるのは、占いの場における語りのテキストである。会話の中には、多層的な複雑さが含まれている。会話はその参与者たちが生きている世界全体につながり、その世界の様々な表情を刻印する。それを分析することは、彼らの経験や知識をつかみ取るということであり、会話が社会的に組織されているということの決定的な重要性が明らかになると考えている。それにくわえて現在までの研究ではあまり目を向けられなかった占いにおもむく以前の状況と占い以後の行動についても詳細に検討する。本論は、時系列的な視点を加味することで、バリの人々がどのように災厄を解釈し、何が災厄時における人々の行動基準となるのかを明らかにするとともに、行為の発動の場

である占いの現場の文化的位置を確認することを目的とする。

2. 占いの現場と人々の行動

出来事の背景

調査対象地域は、インドネシア共和国バリ州カラングスム県(Karangasem)の南東部にあるX村である。霊峰アグン(Agung)やスライヤ山(Seraya)から流れ出す河川が形成した扇状地を利用した農村で、漁労を営む住民もいる。カラングスム県にはプサキ寺院というバリ・ヒンドゥーの総本山がある。バリ南部のバドゥン県(Badun)やタバナン県(Tabanan)に比べて観光化は進んではないが、近年では、海岸部に外国人専用のコテージなど観光施設も見られるようになった。

調査対象とした家族¹は、長老のワヤン・クチョス(人物名は全て仮名)を家長とする総勢48名(男18名、女30名)で構成されている(2002年4月現在)。クチョスは現在までに妻を八名娶り(死去・離婚4名)、家族は結婚した娘・孫娘の一部を除いて同村内に属している。(図1)事件は、2002年2月初旬に第七夫人ルミの次女

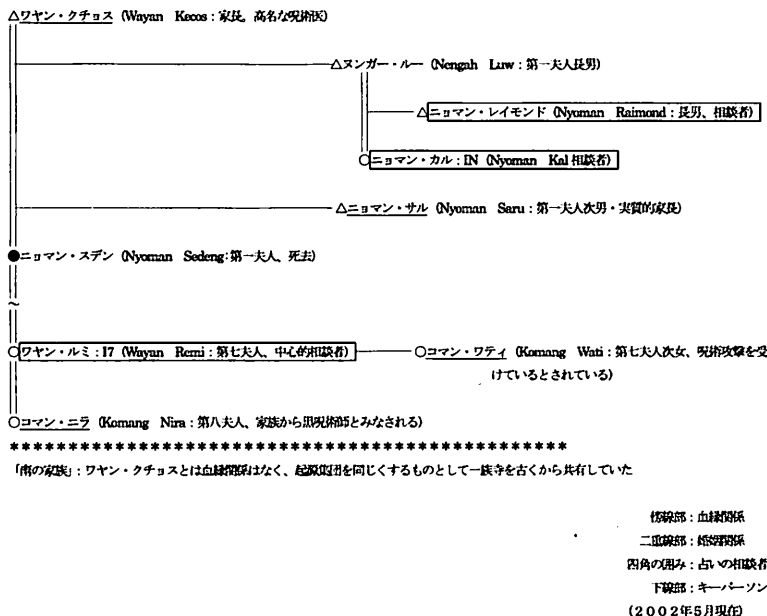


Figure 1 心理的欲求充足尺度の確認的因子分析結果

ワティが黒呪術によって悪霊に取り憑かれ錯乱したことに端を発する。これ以前にも、ワティは慢性の頭痛と腹痛を訴えていたが、この時から悪霊や祖霊が憑依するようになる。彼女に霊が憑依した時の発言から、彼女の病の原因が第八夫人の黒呪術(邪術:Ilmu hitam, pangiwa)とみなされた。さらにこの時期におこった数々の家族の病や事故などの災厄もまた、第八夫人の黒呪術によるものであることが判明する。そこで、第七夫人は娘の病や家族におこった災厄の原因とその対処法を知るために、隣村に住むトゥカン・トゥヌン(tukang tenung:以下トゥヌン)と呼称される女性占い師のもとにおもむく¹。

ここで先にトゥヌンの説明をしておく。トゥヌンはいわゆる巫師であり、依頼者の祖霊もしくは祖霊神を自らに憑依させ、依頼者の質問に答え、また霊の意志を伝える。ここでとりあげるトゥヌンの言を借りれば、「祈り」によって依頼者の祖霊もしくはトゥヌン自身の守護霊を呼び出すことができ、その霊が自分の口を通して語るという。ただし巫師によっては、呼び出す霊が決定している。バリの人々がトゥヌンは様々な占い師の中でも特殊な才能の持ち主であり、性行為の禁止や祈りの義務など神から受ける制約が極端に厳しいと考えている。トゥヌンが語る災厄の原因は大別すると以下の二つになる。

- 1, 黒呪術。病気、事故、家庭や人間関係の不和をおこすとされる。
- 2, 先祖霊の供養不足。浄化儀礼を繰り返して、最後に先祖霊は祖霊神へと神上がりするが、長い間供養されずに放置された霊は子孫を護る力が弱まり、黒呪術を受けやすくなるという²。

占いの行われる場所は、占い師の家の北東に位置する屋敷寺の中である。そこは相談者たちの待合い場所からさほど離れておらず、ほとんど衆人環視に近い状態で占いは行われる。第七夫人は、本稿が対象とする占いより以前に二度

この占い師のところを訪れている。一度目はワティが病におちいった直後の2月初旬で、二度目はワティの症状が回復したとみられた頃の4月15日である。

一度目の時に彼女が尋ねたのは、次女の病の原因とその対処法であった。トゥヌンの答えは、はたして「原因は、男女の二人組が黒呪術を使ったことにある。そしてその人物は家族の者である」とのことだった。トゥヌンは黒呪術師(leyak)についてこれ以上の明言はしなかったが、ワティの憑依時の発言もあり、第七夫人をはじめとした家族は、第八夫人が黒呪術師であることを確信するようになる。第八夫人は以前から「黒呪術師ではないか」という噂はあったが、このトゥヌンの発言により、括弧つきの黒呪術師から括弧のはずれた真正正銘の黒呪術師としてみなされるようになった。ここにおいて、嫌疑から告発というかたちへと事件は顕在化した。さらにこのとき、トゥヌンは黒呪術云々よりも重要なお告げをする。すなわち「黒呪術をうける根本的原因は、先祖の神上がり儀礼(nuntun)を済ませていないことにあり³、そのために先祖は子孫を護ることができなくなった」と神上がり儀礼の必要性を説いたのである。そこで、第七夫人は家族にこのお告げの内容を伝え、家族は神上がり儀礼の実現に向けて頻繁に一族会議を開くようになる。

トゥヌンへの二度目の訪問時には、第七夫人はワティやその他の家族の病が沈静化したと考え、娘の回復具合を尋ねた。このとき、彼女はトゥヌンから娘は完治したとお告げをもらうが、同時に速やかに祖霊の供養をするよう迫られる。これで黒呪術事件の対策は一応の終息をみるわけだが、依然この時点では祖霊供養の問題が残っていた。だが、それから10日あまりたった4月26日、はじめてクチョスの家族は全員でクルンクン県にある祖先の起源寺(Pura Pasek Gelgel)を詣でて浄化儀礼を行い、5月25日には家系が記されたロンタル(椰子の葉にかかれた文書)の奉納儀礼を一族寺(pura Ibu)

で執り行った（これは神上がり儀礼の前段階の儀礼である）。

この家族は神上がり儀礼に向けて準備に怠りなかったが、これらの儀礼を行う上である問題に直面した。家族分裂の危機である。家族儀礼の際に使用する一族寺は、もう一つの家族（長老クチョスの兄弟の子孫）と共有している。彼らはクチョスの家族が出自と考える起源集団パセック・ゲルゲル(Pasek Gelgel)に対する帰依を拒んだのである。もともとはこれらの両家族を含めた一族は、自らの起源集団を明確には知らず、2つの起源集団の候補をもっていた。それがパセック・ゲルゲルであり、プラ・サリ(Pura Sari)であった。クチョスの家族はすでにトゥヌンから、自分たちの起源集団がパセック・ゲルゲルであることを聞いていたが、もう一つの家族はプラ・サリが自分たちの起源集団であることを信じ、クチョスの家族の意見に従わなかった。この家族は一族寺で行われた二度の儀礼をボイコットしたのである。こうした一族の分裂の危機に際して、第七夫人はあらためてトゥヌンに相談をすることになる。以下はそのやりとりである。

占いの現場

以下のテキストは、2002年5月29日に相談者の住む村の隣村であるQ村(カラングスム県内)で採取されたものである。採取方法はビデオカメラとテープレコーダーを使用した。採取されたテキストは、まず現地の人にバリ語からインドネシア語に訳してもらい、インドネシア語を筆者が日本語に翻訳すると作業をえている。その際には、バリ語に存在する敬語や普通語などがどの部分なのか、どのようなニュアンスなのかという点はバリの方に指導を受けているが、十全に会話を捉えきれたとはいえない。本論のテキストはインドネシア語と日本語という二重のフィルターがかかっているため、問題設定の主眼を会話の内容と構成（会話の流れ）としておくことをお断りしておく。また、紙幅の関係

上、導入部を省略していること、原語の併記はおこなわないこともあわせてお断りしておく。斜体になっている箇所は、祖霊が話したと考えられている部分である。（括弧内は筆者の補足）である。

この現場にはI7（第七夫人ルミ）とその付き添いのIN（第一夫人長男の妻）、INの長男、そして筆者がいた。主にTT（トゥヌン）と話していたのは、第七夫人であり、INの長男は一言も発さないままであった。

1-I7：私はご先祖様にお尋ねします。今、誰が賛成していないのかを。それが（その家族の）賛成を得るために教えていただきたいことなのです。

2-TT：もうそのことは言ったはずです、奥さん。三度も四度もご先祖様にそのことを聞いてはなりません。あなたは（あなたの方が）すでに困難を経験することで、その証拠を見たのではなかったのですか？一族寺についていくのはかまいません。しかし、お祈りだけです。なぜならプラ・サリは女性側の先祖だからです。南側に住む家族だけはプラ・サリにいつてもかまいません。この家族は起源が異なります。これについてはすでにご先祖様が三、四回おっしゃいました。男性側の先祖からの子孫は、そしてあなたもパセック・ゲルゲルについていくと約束したはずです。なぜなら、あなたはプラ・サリの子孫ではないし、そのことはすでにご先祖様が知らせたことです。

全ての家族が一つになったなら、その時初めて祖霊神は一族寺に定住したいと考えている。つまりは、一つの一族寺に一つのダディア (*dadia*：父系出自に基づく親族集団) ということだ。そうだろう？それがまさに一族というものであり、もし我々が間違った一族につけば、困難が生じるだろう。他人の家族の中に

入って生活するようなものだ。我々が正しく入るべき起源集団、これを捨てて、違った起源集団に加入する。何が起ころと思う、奥さん？すでに何度もご先祖様はあなたに教えた。あなたはどこへ行っても、先祖が与える決まった説明を求めているのだ。同じ事を問うている。(そして答えは)おまえはパセック・ゲルゲルの子孫だと(いうことだ)。

3-I7：はい、私はクチオスの一族の人間ですし、すでに(先祖がパセック・ゲルゲルであることを)信じていますし、他の家族もパセック・ゲルゲルに加わろうとしています。

4-TT：正しくは一つのダディアには一人の先祖、いま(の状況)はどうなの？プラ・サリの人間がいたり、ゲルゲルの人間がいたり、いったいどっちになるか？

5-I7：いま私は家族が全てが等しく従うようにするため、どうすればよいのかご先祖様にお教えを乞いたいのです。

6-TT：その質問はもうすんだはずだ。(家族が)一つになりたくない、これでご先祖さまが新たに茶毘に付されることができるとか、奥さん？それから、おまえのすべての先祖と祖霊神に一族寺に住んでもらい、供養をしなければならぬ。全員が祖霊神に従いたがっている、そうだろう、奥さん？つまり、子孫達がそのように取り扱わなかったため、今になって問題が起こってしまった。

7-I7：いまでは一族のものは皆約束をしようとしていますし、それを証明しようとしていますし、仰せに従おうとしています。

8-TT：もしングロラスをすると誓うなら、(家族が)一つになることが先である。もし浄化儀礼を行うなら、先祖や祖霊神を呼ぶことになる、そうだろう？今もしも先祖が屋敷寺に招かれて降りてきても、どこに行けばいいのだ。どの起源集団に

おまえは追従するのか。

もし家族が一つになったとして、そしてプラ・サリに加わるなら、おまえは必ず再び困難な事態に直面するだろう。

9-I7：私の家族はすでにパセック・ゲルゲルについて行くつもりです。

10-TT：南に住んでいる者はついていけないのではないか？

11-I7：(そのような者も)います。なぜなら(パセック・ゲルゲルにはいるのを)賛同せず、拒んでいるからです。

12-TT：先祖達もングロラス儀礼を求めているが、半分のングロラス儀礼なんて許されない。もし中途半端なングロラス儀礼なら、ある霊はより高い位置に、ある霊はより低い位置にといった事態を引き起こしてしまうだろう。もしおまえが南に住む家族を含む全員を呼び込むことができると約束するなら問題はないが、お前の家族だけならば許されない。なぜなら、全ての子孫はいずれングロラス儀礼をするからだ。そうだろう？

13-I7：いま、私はどうすればいいのでしょうか？

14-TT：もし本当におまえがパセック・ゲルゲルの起源神に組みするならば、神は必ず一族寺に定住するだろう。そして清い心で起源神を敬うなら、必ず神は祖霊を一族寺にすむように命じるだろう。神は一族寺に住むのをまだ迷っている。なぜなら、いまだに家族達は争い、また混乱しているからだ。

15-I7：祖霊神様に教えを乞います。皆の行いをよくするために、賛成しないダディアの人々をどうすればよいのでしょうか？

16-TT：どうすればいいか。皆は頑固に対立している。

17-I7：はい、まさにその通りです。

18-TT：どちらの先祖集団と対立したいのだ？プラ・サリにつくのか？皆で決めた決定

が、もしパセック・ゲルゲルに加入するということなら、ご先祖達も従うだろう。もしプラ・サリならば、いったいどうなるだろうね？

19-IN：では、私がどちらかに従うのが正しいのでしょうか？

20-TT：おお、もしあなたが一族寺でングロラス儀礼をするなら、もし半分の間人だけで行うならば、半分の祖霊達はとうなるでしょう？ご先祖様達もングロラス儀礼が行われることは喜ばしいのです。もしあなたがングロラス儀礼に家族全員を集めることができればですが。

21-I7：それなら、後ほど、もう一度家族会議をしてみます。

22-TT：決定がこちらこちらに行くので、私は考え続けているのだ。私が家族を求めるのは、当たり前のことだろう？正しいものを求めて家についたら、(祖先をパセック・ゲルゲルと)信じる者がいないならとうだろう。もちろんプラ・サリの出身者もいるが、それは女性側の家系のことなのだ。それはもう何度もいったはずだ。

23-I7：私の心はもう決まっております。パセック・ゲルゲルに従います。

24-TT：すべては出そろいました。もし以前のようにあなたの家族を説得できなければ、一族は倒壊するでしょう。あなたの家族がすでに多くの病気を経験しているからです。

25-I7：まさにその通りです。

26-TT：あなたの夫(クチヨス)は相当な知恵の持ち主ですね？いろんなところで知恵をふるったが、ダディアの人々までは説得できなかったのですね。

27-I7：以前の一族会議の時にそうしましたが、賛成しない者がありました。どうすればいいのでしょうか？

28-TT：もしその者がずっと賛成しないならば、

ご先祖様達はダディアにいるお前達が二つになることを望まない。お前は必ず祖霊神、起源神に従い、一つにしなければならない。しかし、ングロラス儀礼の時は、すべての子孫達がングロラス儀礼をしなければならない。賛成の者も反対の者も必ず供物を捧げ、望むと望まないにかかわらず、だれもが必ず葬送儀礼に参加しなければならない。

そこで祖霊は教えよう。全ての者が従うために、すべての子孫達が葉にあがるために、ングロラス儀礼からまた海に行くのが正しいというのか？(先祖は)子孫を見守るための場所を求め、起源神とともにいることを求め、家族皆が一つになることを求める。そうだね？なぜなら多くの子孫達もまた子供・孫を抱えている。しかし、その知恵を信じ、また使われないままの知恵を信じるとするなら、一族寺はそのまま放置されたままであろう。

29-I7：今、ご先祖様は、誰が一族寺を大事にしているように見えますか？私の夫の家族で一族寺の手入れをしている者の中で。

30-TT：皆、大事にしている。しかし、もし南に住む者が家族を別れさせたいとするならば、いつ一つになるのだ？

そう、今賛成している者もしていない者もお祈りをするために一族寺に来ている。妨げてはならない!!というのは、お前が祈りをする者を妨げ、もしその者が来ないようになれば、それはいけないことなのだ。お前は問題を複雑にはしてはならない。その者は、今、家族を一つにしたいと思っている。お前にとって喜ばしいことだ。だが喝采してはならない。もしお前が不安になりたくないなら、そのままにしておき、お前の心の一つにして置きなさい。これは実は難しいことなのだ。もしングロラス儀礼を行いたいなら

ば、半分の間人ではいけない。もし葬式ならば、参加する者・しない者があるだろう。それはどちらでもかまわない。しかし、ングロラス儀礼は必ずすべての人間、若い者も年寄りも若者も、全員参加しなければならないのだ。

今は再び話し合うことが先決だ。たとえ彼がまた同意しなくとも、説得を続けなさい。わかったか？もしお前が家族に対して誠実ならば、葉に上がることができよう。

31-IN：はい、本当にそう望みます。すべての子孫を呼び集めて相談します。

32-TT：北にいるグディアの人々はパセック・ゲルゲルである意志を強め、南にいる者はブラ・サリである意志を固めている。しかし再び決意を翻すことはできる。

33-IN：なぜなら、すでにそのような者もいます。私の家族はすでにパセック・ゲルゲルの寺院で尋ねております。今、私は、私たちの神がパセック・ゲルゲルであることを確信したのです。

34-TT：もうすでにクルンクンの寺院で見たのですか。ロンタール文書の中に子孫のすべてがそこにあったことをみたのですね。ブラ・サリでは、ありませんでしたね、奥さん？

35-I7：そのとおりです。

36-TT：もちろんあるわけがありません。子孫達がブラ・サリでない。それはすでに三、四回いいました。

37-I7：まさにおっしゃるとおりです。祖霊神様は賛成している者・していない者を知っておられますね。祖霊神様の教えのために、反対者に対して今祖霊神様はどうすればよいとお考えですか？

38-TT：その者は沢山の病気をし、困難があったね。しかし私は話（つぶやき）をその者に与えた。それからどうしたいのだ？

39-I7：その賛成しない者は、どうされたいの

でしょうか？パセック・ゲルゲルにつきしたがいたいのでしょうか？

40-TT：そうならば、最後まで先祖が見ているところ（一族寺）で会合しなさい。それでも、その者はブラ・サリに参加しようとするかもしれません。それから、どうしたいのだ？

41-I7：もうすでにそうであるなら、何をすべきなのでしょう？

42-TT：はい、今、先祖はどうすべきか。まだ生きている者で話のうまい人間に、パセック・ゲルゲルに従うのが誰かを会合の際に話してもらえば、一族は一つになれるのではないのでしょうか？

43-I7：はい、そのとおりです。今度の満月の日にパセック・ゲルゲルを信じる人を集めます。

44-TT：その人々が来て、パセック・ゲルゲルを信じない人は鼻の真ん中を見るまで来ない（絶対に来ないという意味の慣用句）。

45-I7：はい、その通りです。聞かれるにはよくない会議です。

46-TT：話に混乱はないでしょう。

47-IN：いま、祖霊神様はおっしゃいました。彼らがパセック・ゲルゲルに従うためだと。

48-TT：なぜなら、祖霊がいうには、もし彼らがパセック・ゲルゲルに従いたいなら、お前は大喜びをしてはいけないし、喝采してもいけない。そう、もし彼らが自分の心通り自分たちの言葉に従うなら、ブラ・サリにいつてしまうだろう。決してお前は混乱しながら計画を遂行してはならないし、続けてはならない。もしよい心持ちでことを為すならば、力を得ることができ。どちらかを判断しなければならないときは、正しく判断しなさい、よい方に判断しなさい。今、そこではあなたは一人に見えます。

49-I7：はい。祖霊神様の平安、健康、幸福の

ために。

50-TT：困難を経て、病を経て、子孫達は重い病を患ったように、沢山の困難にあったように感じている。

51-I7：今ご先祖様は全ての子孫を求めていらっしゃる。

52-TT：そう、いまは家族を集め、もう一度会合を持つことです。いいですね？もしはっきりとプラ・サリに行く決めてしまったなら、早く尋ねることです。いまあなたはパセック・ゲルゲルに従うことを決めた。もし彼らがプラ・サリに入るなら、あなたはパセック・ゲルゲルの子孫をさがしなさい。行動をおこしなさい。

そう、もし葬儀（ングベン）のようなものを正しいとするなら、全ての家族が従う必要があるのか？そう、あなたはパセック・ゲルゲルの一つの聖水を使う家族を探し、家族を一つにしなければならぬ。そして今お前は考えをよきものにし、覚悟をする。そうすれば先祖はお前を助けるだろう。

53-I7：はい、いま、祖霊神様は正しく行動する方法を教えてくださいました。なぜなら、馬鹿な子孫をお持ちになったからです。けれども、外にあらうとどこにあらうと、平安のためにご先祖様は私たちを見守って下さっております。

54-TT：その通りです。もしお前が家族を一つにしたいなら、それは祖霊に対しての証明になるでしょう。それがすめば、祖霊神はプラ・イブに住みたくなることでしょう。しかし、あなたはングロラスをする約束をしなければなりません。もし子孫を取るならば、子孫は皆がガジュマロの木の上に行くことができるでしょう。あなたはどれだけのことができるのか？半分の力しか無ければ、半分の力しか使えない。ゆえに、自分で全てのことを為そうとしてはいけません（自分の力

量のこと以上のことはするな）。もし半分の力で全てを行おうとするなら、なにも得るものはないでしょう。

55-I7：ングロラス儀礼をする最低限の準備はできています。

56-TT：それは余りいいことではありません、奥さん。ングロラス儀礼の半分の段階をまずやる姿勢でいなさい。家族を一つにするのが先決です。そのために人間関係の回復をすることが先です。相互に助け合うために。しかし、まだ考えが定まらず迷っているならば、行動するのは難しいでしょう。できるか、できないか。子孫達はくだらない考えを捨てなさい。

57-I7：はい、いまなお、くだらない考えを持つものがいれば、その考えを捨てさせます。ご先祖様が家族を一つにするために教えて下さったのだから。

58-TT：わかりましたね。お供えのことはもういいましたね。忠告しましたね。従いなさい。あなたは祖霊神に約束しなさい。そして証明しなさい。従いなさい。あなたが判断することは、起源神に従うことです。そして家族を一つにしてご先祖様にお供えをしなさい。ご先祖様は行ってしまわれた。

3. 考察

会話の流れと特徴

トゥヌンと相談者の会話の流れを大雑把に説明すると、①相談者の抱えている問題の所在を明らかにし、②問題の対処法とそれに関する条件を教え、③具体的・抽象的な忠告を与える、という三段階になる。トゥヌンの語りの主題は、「起源集団を明確にし、家族の意見を一つにまとめ、浄化儀礼を行えば、家族に安寧が訪れる」という単純なものである。トゥヌンの長い語りはこの論調から大きく外れることはなかった。しかし、その流れの中で、われわれにとってきわめて奇妙に見える転調、不意の加速、冗長な

同語反復が含まれていることに気づく。では、場面場面において、それらはなにを意味しているのだろうか。

まず、やりとりの流れの中で、質疑応答がしばしばかみ合っていないことに気づく。たとえば、上述の5～6の会話では、「家族を一つにするためにどうすればいいか」という質問に対して、トゥヌンはすでに答えていると返答し、対処方法は述べないまま相談者の不明や不誠実を責めるのである。次に13～25のやりとりをみると、13で再び相談者は具体的な方法を問うが、トゥヌンは相談者の信仰に対する意志の重要性を説き、論点がずれていく。そして15～18では、質問者の質問に対して質問で答えるというかたちを取り、相談者への脅迫とも取れる発言をする。18で起源集団の選択を迫られた相談者は、19においてその正解を尋ねるが、20での答えは祖霊が安寧を得る条件について話すのである。そして、21で相談者はこれからの行動の具体的指針を表明するのだが、それについては何も意見を述べず、具体的方策を示さないまま祖霊の不満を表明するのである。相談者はそれに応じて、すでに繰り返し述べているはずの起源集団への参加表明をするのである。24において、トゥヌンはあたかも話をついたかのように語り、もし一族を一つにできなかつたら再び災厄の再発があるということを匂わせる発言をする。それを受けて相談者は、祖霊の意見に同意するのである。全体を通して看取できるのは、トゥヌンは具体的対処法を教えないままに話を進める傾向にあり、いわばロジックではなくレトリックで相談者を説得しようとしているということである。

ただ、たしかにやりとりの後半部では、具体的意見の提示をしている部分もみられる。29～30、40～48などが、それである。29～30では、相談者が「誰」という質問をしているのに対し、トゥヌンは「一族全員」という差し障りのない答えを返す。40～48において具体的に、会議を開くこと、その際には話の上手な人間に説得に

当たらせること、儀礼を速やかに行うためにまず賛成者だけで会議を開くことの容認、そして反対者が再び決意を翻すようなことがあれば慎重に扱うことなどの方策が述べられている。ただし、これらの意見はわざわざ祖霊に指示をもらうほどのものではなく、いわば当たり前の一般論にすぎない。しかし、相談者はありがたく祖霊の意見を傾聴し、その指示を行動に移そうとするのである。これについては後述する。

では、次に矛盾をみていこう。この会話の中での最大の矛盾は、一族統合の最大の焦点になっている「南に住む家族」に関わるものである。前述した2の段階では、「南の家族は起源が異なる」のでプラ・サリに追従してもかまわないといっているにもかかわらず、12において「南の家族」のパセック・ゲルゲル参入は不可欠であると前言を翻している。22では、プラ・サリは女性側、つまり結婚をして嫁いできた女性の起源がプラ・サリであるといっているのである。もちろん父系出自集団を形成するバリにおいてこの論理はおかしなものではないのだが、2の発言からすると明らかに矛盾する。そして、32において、「南の家族」の決意を変えることができるという可能性を述べるのだが、44と46では「南の家族」抜きで家族会議をすることを容認する。論理展開は支離滅裂であり、すでに最初の段階でこの件に関するロジックは破綻している。当然、相談者の応答や雰囲気に応じて論理展開を柔軟に変化させたとも考えられる。しかしながら、相談者（占い師も？）はその論理的矛盾を気にせず（あるいは気づかず）、質問・傾聴を続けるのである。さらにいえば、相談者は実際には自宅から西に住む家族をトゥヌンの言うところの「南の家族」とみなしているのである。筆者がそのことを相談者に指摘すると、西の家族の子供が相談者（第七夫人）の自宅より南に住んでいるからだと答えた。これもまた明瞭な拡大解釈である。しかも人々はとくに検証をするでもなく、現実的対処を実行に移していくのである。では、なぜこのようなことがお

ころのだろうか。

浜本満は占いの基本的特徴を、「ト占に先立って人々がもっている状況理解や、人々がト占に向かって発する質問と、ト占の結果に、論理的つながりが欠けていること」にあるとし、それを「恣意性の現象」と呼んでいる（浜本 1983）。ここで見られた矛盾を恣意性として考えるならば、トゥヌンは相談者との会話において論理性よりも会話の流れを重視し、いわば即興的なパフォーマンスとして会話を組み立てていると考えられる。従来、人類学では、占いと占い師が相談者との会話から社会分析を行い、その答えを解釈し見つけていく機能を帯びているとしてきた。また、占い師が主導的に対処法を探知するともみなしてきた。占いには、おそらくそのような部分があるのは否めない。しかし、ここで重要なのは、「ト占の結果が示す矛盾は、その回答の不備をではなく、かえって人々の理解の不完全さを示すものとして受け取られ、人々はト占の答えが意味をなすように、理解そのものを作りかえようとする」（浜本 1983：38）点にある。つまり、占いには社会分析などを経なくとも答えがあり、その答えの正当さはア・プリオリに確信されている⁶。すなわち、人々は、恣意的な答えでも有意味であるはずだという前提で解釈し、意志決定をし、行動しているのだ。そして、その矛盾を含む占いのメカニズムから創出された占いの答えを、社会の中の行為のレベルに変換する際、有意で正当なものという意味づけるのである。そうすることで、矛盾は実際上の行為のレベルにおける障壁ならず、解消するのである。

そして、次に同語反復である。トゥヌンは相談者がどのような質問をしても、「家族を一つにまとめて儀礼をしなければ、祖霊は浄化されない」という主題に還元する。また、相談者もそれを得心のいく答えとして認める。それは他の具体的な答えを欲する場合にも、それで納得する（あるいはせざるを得ない）のである。この主題は、「家族が一つになり、儀礼を行う」と

いう条件が達成されてはじめて、「祖霊が浄化される」という結果が導き出されるという図式が成立している。つまり、可視的世界の秩序が修復されることが、とりもなおさず不可視の霊的世界の秩序の回復になるといっているのだ。とするならば、「家族がひとつにならず、儀礼をしない」という命題は、「祖霊が浄化されない」ことに対する帰属原因ということになる。すなわち、二つの世界は相互補完的またはやや不可視的世界が可視的日常世界を先行しているようにみえたが、実のところは、可視的な日常世界が不可視的世界を先行しているのだといえよう。あるいは、やや視点を変えれば、この語りを、可視的日常世界においてバリの常識的慣習を遵守することが、不可視的世界の秩序を護ることになるという「比喩的理解」を行うための語りといえるかもしれない⁷。では、占いが具体的な答えもなく指針も示さないとするならば、相談者は占いに何を求めているのだろうか。

トゥヌンと相談者のやりとりの前半部は先にもみたとおりの具体的な質問や対処法を尋ねる流れであった。やりとりの後半部分はどうか。43～46の流れでは、相談者のこれから起こす行動についての容認をしているのである。つまり、「南の家族」を呼ばないままに一族会議を開くということは、一種の抜け駆けであり裏切り行為（45にあるように）なのだが、それを容認するのである。そして相談者は47のタームで「いま、祖霊神様はおっしゃいました。彼らがパセック・ゲルゲルに従うためだ」という言質を取り、「南の家族」抜きで家族会議を開くことの正当性を得るのである。つまり、相談者はこの行動を、家族が一つになるため、ひいては儀礼を行うためには、正しく必要なことと認識するのである。さらに52で、トゥヌンは祖霊の教えを護れば加護を与えるといい、53において相談者はこれからの行動に確信を持ち、祖霊を称揚するのである。54～58では、トゥヌンは慎重に行動することと祖霊の言葉に従うことを勧め、相談者は57の発言にあるように祖霊との約束を

し、言葉をもらった自分の行動こそ正しいと考
えるようになるのである。ここであらためてや
りどりの流れを俯瞰すると、最初は相談者は問
題の対処方法を求めていたのが、後半部では結
論と承認をもとめるようになるのである。すな
わち、占いの場における祖霊の承認こそが、相
談者が未来への行動の意志決定をするにあたっ
て、最も希求するものといえるだろう。

災厄を日常的な方法では説明のつかない事態
とするなら、占いの中においてはじめて災厄は
可視的日常世界に立ち現れ、同時にリアリティ
を発現するのである。つまり、占い師は、相談
者の経験の中に含まれてはいなかったある要素
をそこに持ち込むことによって、災厄原因とは
何々でありその対処をどうすればいいかを提示
するのである。相談者は、自らが認知できる構
成要素に不可視の超自然的要素を付け加えるこ
とによって、自らに起こった災厄の説明を安定
させることができるのである。「黒呪術」や「祖
霊の零落状態」が単なる仮説的な知識から経験
的にリアルな存在に変貌するのも、まさにこの
ときである。それは自らが組織する経験のリア
リティによって、自らのリアリティを獲得する
のである（浜本 1993: 17-18）。すなわち、占
いの現場とは、超自然的存在を介入させること
で相談者の過去の経験を省みさせ、そのコンテ
キストを書き換えさせると同時に、不確定な未
来に対する行動を適宜保証するという、多元を
錯綜する通時的な場なのである。

4. 結び

トゥヌンへの訪問後、相談者である第七夫人
は早速行動にはいった。まず、第一夫人の次男
であり実質的家長であるニョマン・サルに結果
を報告し、それを聞いたサルはよき日を選んで、
パセック・ゲルゲルの賛成者のみの家族会議を
開いた家族の中で賛成している人間を使って、
トゥヌンの発言を根拠に反対している家族の説
得に当たった。その際には、幾人かは説得に応
じて起源集団をパセック・ゲルゲルにあらため

るようになったが、「南の家族」と称された人々
は首を縦に振らなかったのである。

するとクチョスの家族は「南の家族」を無視
するかたちで、浄化儀礼の準備をすすめるよう
になった。あらためて「南の家族」抜きで会議
を一族寺で開き、役割と費用の分担を決めはじ
めたのである。そこで筆者は「南の家族」の処
遇はどうするのかと家長のサルに尋ねたところ、
自分たちの起源集団がパセック・ゲルゲルで
あるのは明白であり、従わない彼らが間違っ
てるのだという。そして自分たちの態度は仕方
のないことであり、また正しいのだと弁明した
のである。ここにおいて、トゥヌンの発言が都
合のよいように捨象されたのであった。トゥ
ヌンの言では「家族を一つにしなければならない」
という条件を提示されたにもかかわらず、パセ
ック・ゲルゲルに従い儀礼をおこなうことの
みが最優先事項となって、その条件を果たせ
なかった責任が「南の家族」へと転嫁された
のである。

ここで、比喩を用いてこの事例を説明したい。
占い師を情報検索のできるソフトをそなえて
いる端末機だとすると、不可視の超自然的存
在はホストコンピューターである。相談者は
端末機の利用者である。利用者は端末機に
自分の知りたい情報（この場合では自分自身
の状況等）をインプットし、ホストコンピ
ューターにアクセスをして情報を得るとい
うかたちになる。端末機を通して得た情
報とは、外在する不可視の民俗知である。
もちろん、実際の占いの場はコンピ
ューターのように簡便・迅速ではなく、回
りくどい手順が多いが、そのメカニズム
は類似しているといえるだろう。つまり、
占いとは、災厄時において個々の利用者
に不可視的世界の情報を提供する文化装
置なのであり、また利用者はそこから
得た情報を自らの行為の準拠として
用いるのである。そして情報は不可視
的世界の権威をも帯び、正統化されて
いるのである。だが、先にみたように
相談者は必ずしも占いの言葉通りに
動かず、そこから得た情報は、行為
のレベルに移行する段になって新た
に取捨選択

がなされたのである。つまり、人々は占いというシステムおよびその情報を自らの都合に合わせてながら、きわめて道具的に使用しているといえる。

相談者は、占いによって自らに起こった災厄という状況の把握をし、それが処理可能であることを知る。そして最も重要なのは、占いから得た言葉によって、自らの未来の行動に正当性をもたせることなのである⁸。本事例では「儀礼を行う」という大義のために「家族を一つにする」という条件に目をつぶる結果になったが、それでも人々は自分たちの行動は一貫しているという信念を持っていた。つまり、占いの解釈を自分たちに有利に展開させ、再編成したのである。占いを利用した人々は、ある種のストレスフルな状況を脱するために、黒呪術や祖霊の危機、そして占い等の文化資源の諸要素を組み合わせ、あるいは操作しながら自らの行動に社会的有意性をうちたてたのであった。人々は文化によって行動させられるのではない。そうではなく、文化をもって行動し、日々を更新し続けるのである。人間の行動は、文化の枠組みによって行動を規制されているといわれている。それは一面において正しい。しかし、もう一面においては、文化と枠組みの中で人々が文化を利用する、たくましい姿が浮かび上がるのである。それは、人間と文化とが相克しつつ、融和する瞬間といえよう。

5. 今後の課題と展望

本論は、占いの現場のテキストを詳細に検討し、また出来事の背景と占い後の人々の行動を追うことで、バリにおける占いのあり方の一例を示した。本事例において示された問題の解決策は儀礼の実行であった。出来事には原因があり解決へと向かうプロセスがあるが、結局のところすべての彼らの行動は儀礼の開催へと収斂されており、儀礼こそが平安と秩序を取り戻す唯一のものと捉えているようにみえた。その達成のためには時に細則や意見の齟齬などを無視

することも辞さないこともままあった。一族のこれからの指針を示す占いでさえ、儀礼を達成するための補強材料のひとつになってしまっているのである。バリでは、平安の維持も不幸であることからの脱却も、儀礼をもって購われると考えられている。ギアツが儀礼をして「儀礼はそれ自体が目的」(ギアツ 1990)であるというのも、首肯できるように思う。あらゆる出来事のモチーフ・安寧や災厄、そして本事例で見た占いなどは、最終的に儀礼に結び着けるための「演出」にすぎないのではないか。極論すれば、そのような印象受けざるを得ないのが、バリのバリたる所以であると考ええる。

筆者は本事例のみをもって、バリの占いとはこうであるという一般化は控えたい。広大かつ多様性に富むバリ文化においてそれをおこなうことは、現在の筆者の力量をいささか越えており、事例も少なすぎるだろう。現在のところでは、本論をバリ東部の個別事例の考察と捉えていただければ幸いである。さらなる資料の収集・調査を重ねることで今後の課題としたい。また、インフォーマントが占いに赴く原因となった黒呪術事件については別稿を用意する所存である。

¹ 本論では「家族」を一人の家長を頭とする父系血縁集団とし、「一族」を一族寺(Pura Ibu)を共有する血縁集団、「ダディア(dadia)」もしくは「起源集団」を先祖の起源を同じくする集団として便宜的に使用する。

² それぞれ黒呪術による病をpeperentahanといい、神霊による病を kesisipan という。

³ 葬送儀礼は、ンガベンNgaben(火葬)→ングラスNgeroras(祖霊が海にいる状態)→ヌントゥンNuntun(祖神として陸(一族寺)に戻り、家族を守護する)の段階に分かれている。

⁴ バリでは、霊は火葬されたあと、浄化儀礼によって海におもむくまでのあいだ、墓場近く

の木（ガジュマロ等の大木）の葉に住むという信仰があり、この場合、死後先祖の仲間入りをするを指している。

- ⁵ この場合、この家族がヌントウンを行わない（行えない）、すなわち祖霊を一族寺に戻そうとせず海に放置したままでいいのか？という揶揄が込められている。
- ⁶ この議論については、小田（1986）と浜本（1983）に詳しい。
- ⁷ 占いの語りにおけるレトリックの問題は床呂（2002）を参照のこと。
- ⁸ このあたりの議論は、医療社会学などの分野で評価されているアントノフスキーのSOC（Sense of Conherence：首尾一貫感覚）理論から着想を得ている。首尾一貫感覚とは「その人に浸みわたった、ダイナミックではあるが持続する確信の感覚によって表現される世界規模の志向性のこと」と定義されている。詳しくはアントノフスキー（2001）参照。

参考・引用文献

アーサー・クラインマン

1992 『臨床人類学』（大橋英寿他訳）弘文堂
阿部年晴

1975 「部族社会における救い」「救い」（梅原正紀他）弘文堂

1997 「日常生活の中の呪術－文化人類学における呪術研究の課題－」『民族学研究』62巻3号

アーロン・アントノフスキー

2001 『健康の謎を解く ストレス対処と健康保持のメカニズム』（山崎喜比古・吉井清子監訳）有信堂高文社

アルフレッド・シュッツ

1980 『現象学的社会学』（森川真規雄・浜日出夫訳）紀伊国屋書店

上野千鶴子

2001 『構築主義とは何か』（上野千鶴子編）頸草書房

エヴァンズ＝プリチャード

2000 『アザンテ人の世界 妖術・託宣・呪術』（向井元子訳）みすず書房

小田亮

1986 「災因論と法・占い・モノ語り」『社会人類学年報』vol.12

クリフォード・ギアツ

1990 『ヌガラ 19世紀バリの劇場国家』（小泉潤二訳）みすず書房

小堀哲郎

2003 「生の肯定－高齢社会の健康－」『エイジングと日常生活』高田知和・木戸功編，コロナ社

菅原和孝

1998 『語る身体の民族誌』京都大学出版会

床呂郁哉

2002 「語る身体、分裂する身体－スルーにおけるシャーマニズムの言語行為論」『日常実践のエスノグラフィー－語り・コミュニティ・アイデンティティ』（田辺繁治・松田素二編）世界思想社

長島信弘

1983 「ケニアのテソ社会における病い－占いからみた症状と病因を中心として－」『民族学研究』48巻3号

浜本満

1983 「ト占(divination)と解釈」『儀礼と象徴－文化人類学的考察－』（財）九州大学出版会

1993 「ドゥルマにおける説明のモード」『民族学研究』58巻1号

1997 「妻を引き抜く方法－規約的必然としての「呪術」的因果関係」『民族学研究』62巻3号

Belo, J.,

1949 Bali : Randa and Barong. Sattle & London : Univ. of Washington Press

1970 Traditional Balinese Culture,

New York, Columbia University
Press

吉田禎吾

- 1978 「憑依・儀礼・世界観 バリ島民の憑依
と儀礼」『催眠シンポジウムⅦ 宗教に
おける行と儀礼』成瀬悟策編 誠信書
房
- 1980 「バリ村落の儀礼と象徴」『歴史的文化
像』, 新泉社
- 1983 「バリ島における呪術と象徴世界」『宗
教と世界観 -文化人類学的考察-』
(財)九州大学出版会

渡辺公三

- 1983a 「病いはいかに語られるか -二つ
の事例による-」『民族学研究』48巻
3号
- 1983b 「『神判』の解体 -アフリカにおけ
る妖術現象の歴史民族学への一視
点-」『儀礼と象徴 -文化人類学的考
察-』, (財)九州大学出版会

[2003年5月19日受理]

Observations on mishaps, divination and the standard of behavior
—viewed through the cases in eastern Bali in Indonesia

Atsuro Murata*

Abstract

The purpose of this paper is to show, by presenting and analyzing transcribed texts of divination sessions among the Balinese, how divinatory speech transforms a client's problematic situation of its and establishes its own credibility. Their situation before divination and action after divination are analyzed in this paper. That is because it has been in most studies just on scene of divination at that time. Therefore we need a longterm view to study the standard of human action.

Among the Balinese people, divination plays an important role in directing people's actions in problematical situations where the interference of invisible agents, such as witchcraft, possessive spirits, or ancestral shades, is suspected. There is a major divination in east Bali. It is called "*tukang tenung*"(meaning "diviner"). This is a mediumistic type of divination deriving answers from a variety of patron spirits who possess the diviner. Divination is the only available means to obtain information concerning the hidden side of daily life where various invisible agents are active. This divination has authority, and the clients believe its information. It follows from this that the clients' action may depend on such words and information. But in practice, if they find the divination unsuitable for their purposes, the clients could re-interpret the words from *tukang tenung*. That shows they don't need the explanations of the invisible world. But something is needed here, but depends on her meaning, they really need authority for their behavior.

We often hear that culture regulates our action. It is the truth of human nature, but indeed there is another aspect that people take advantage of cultural resources.

*Graduate School of Human Sciences, Waseda University